



2022年12月15日
第87号

JR東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 助川一実

編集情宣担当

ホームページ

<http://www.jreu-yokohama1.jp/>



イーハトーブ

12月15日号

先月20日、カタールの地で開幕したサッカー・W杯。その視聴者数は全世界で35億人を超え、夏季五輪と並んで最も世界で注目されているスポーツの祭典であり、その経済効果、規模は五輪をも凌ぐそう。

五輪にW杯、どちらも出場している選手や関係者など、たゆまぬ努力の上で競技に挑むその姿は興奮や感動を人々に与えてくれる。しかし、その裏側にはスポーツの感動とは裏腹に巨額なスポーツビジネスとして、許しがたい私腹を肥やす資本の姿や企業犯罪があることも見逃してはならない。今になってスポンサー契約を巡り次々と発覚している東京五輪での汚職事件も一例である。

今回のW杯は「史上最も高額なW杯」であり「史上最も死を招いたW杯」だ。桁外れに高額な放映権と、会場やインフラ工事の劣悪な労働環境は問題となっている。

これは私たち労働者にとって他人事と無視できるものではない。カタールでのW杯は、中東初のホスト国として猛暑の夏場を避け冬季開催となったが、酷暑が与えた影響は選手ばかりではなかった。オイルマネーを誇示するかのようによびえる大会会場などインフラの裏には、炎天下において搾取的な労働条件で酷使され、命を落としてきた移民労働者たちの悲惨な現実がある。開催決定から10年、建設ラッシュが生んだ移民労働者の大量死は6千5百人とも1万5千人にも及ぶとも言われている。命の危険を生じるほどの炎天下で働かせられながら、時給は1ポンド（約170円）にも満たないそう。南アジア5カ国からの移民労働者だけで毎週12人が命を落とす計算であり、劣悪な環境であった宿舍など労働中以外の死亡事例も相次いでいた。しかしながら、その多くは「自然死」とされているのだ。報道されている6千5百人ないし、1万5千人が全てW杯に直接携わっていないとしても、同国における移民の厳しい労働環境は明らかである。行き過ぎた資本主義の影響がサッカー界にも如実に現れ、その象徴がカタールW杯なのではないだろうか。

生きる為、生活する為に働く場で命が奪われるような事はあってはならない。劣悪な環境下におかれても、より劣悪な環境と比較し、「まだマシだ」などと考えていけば、あつという間に命を奪うような職場は目の前に現れる危機感を持たなければならぬ。

(K・K)

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちが外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。